

特 71

917

THE COMMON
SANITATION DENTAL

廣 島 友 國 書 肆 發 行	通 俗 齒 科 衛 生	醫 士 熊 谷 鉄 之 助 著
--------------------------------------	----------------------------	--------------------------------------

301460-001-3

特71-917

通俗齒科衛生

熊谷 鉄之助 / 著

M34.3

CBL-0001



71

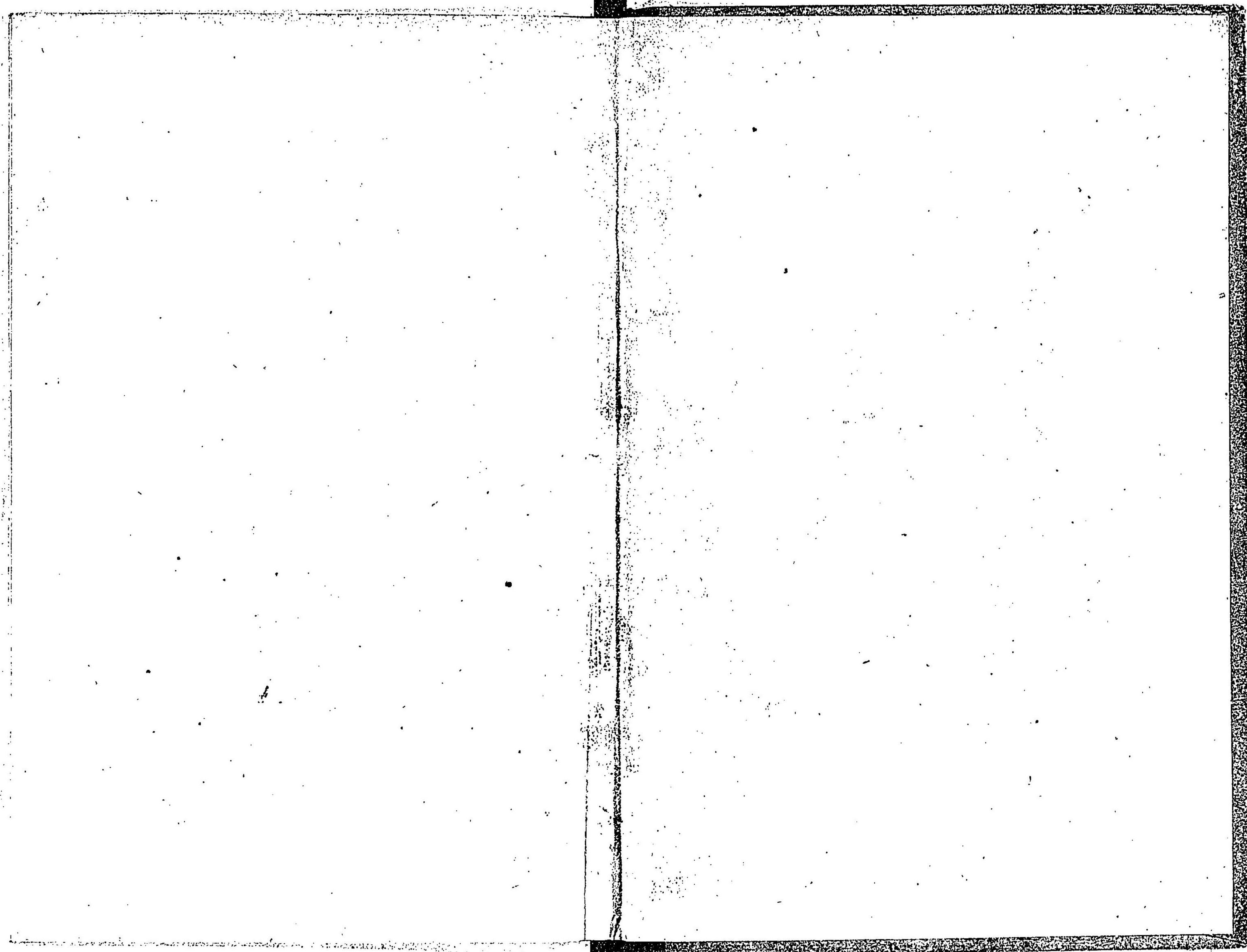
917

THE COMMON
SANITATION DENTAL

醫士 熊谷鉄之助 著述

通俗
齒科衛生
完

廣嶋 友田書肆發兌

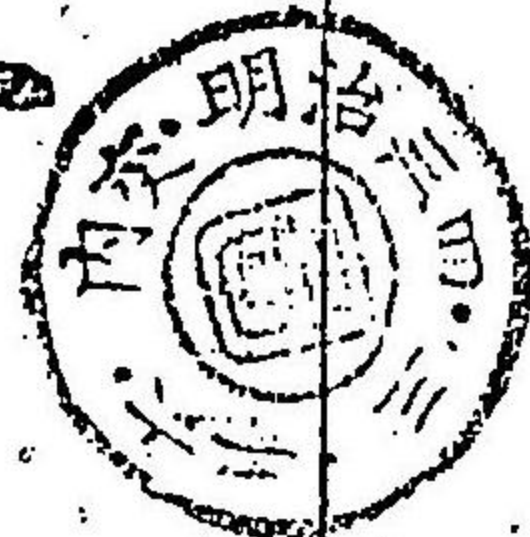


THE COMMON
SANITATION DENTAL

通
齒
科
衛
生
完

醫士 熊谷鉄之助 著述

廣嶋 友田書肆發兌



特71
917

俗通
齒科衛生

目次

一 齒科醫術畧記	一
一 口腔	七
一 齒牙	一
一 齒牙の分拆	六
一 齲齒	七
一 口腔炎	一
一 乳齒及び成齒	三
一 齒牙發生順序	五
一 乳齒の難生	七
一 成齒の難生	九
一 齒牙と全身の關係	二

一 熱病中の注意	三
一 齒石及び血石	三
一 涅齒	三
一 磨齒粉	三
一 齒牙に砂糖及び飲酒の關係	四
一 治療	四
一 齒牙充填	四
一 義齒	四
一 再植術	四
一 齒列排乱	四
一 口蓋破裂	四
一 學生と齒病	四
一 結論	五
目次畢	〇

俗通 齒科衛生

緒言

世界何れの國の人と雖も無病にして長命を望まざる者あらんや然れども之が衛生の法を行ふの人は蓋し稀有に屬す又世間には一眼二足と稱へて此二病は恐るゝもの比較的によくして一度之が病に罹れば早く醫治を請ふと雖も亦之れが衛生を重ずる者とはなし苟しくも吾人の生命を全ふする器關即ち榮養物を胃に送達するところの口腔は齒牙に依り食物を咀嚼し

兼て胃の消化を助くるものにして實に齒牙の健不健は全身健康上に大に關係を及ぼすものにして若も齒牙にして病を發する時は食物丸呑のために胃を害し夫よりして諸種の疾病を惹起し終に身体衰弱のために知らず識らずの間に死を招くことあるは時々予輩の之を認むる所なり然るに何事か世間には齒牙の病に至ては輕視して之が醫治を求むるもの尠なく又之が衛生法を行ふの人殆んど皆無なるは予が之を坐視傍觀するに忍び得ず奮然想を決して本書を著はし齒科衛生法の忽緒に附すべからざることを説て聊か濟

世の義務を盡さむとす然りと雖も予や淺學にして尙ほ且つ無識故に此書も元より粗漏あるを免れず讀者諸氏乞ふ幸に之を諒せられむことを

明治辛丑三月

熊谷鉄之助識

通俗齒科衛生

熊谷鉄之助講述

坂本政之筆記

齒科醫術畧記

抑齒科醫術の我國に行はれしは實に近來の事にして之が二三十年以前に於ては一の營業者たる入齒師又は細工屋の營爲する處たりしなり而かも尙之を測つて徳川將軍の時代に見れば侍醫中殊に口中科即ち今時の齒科の設けありしも其術や拙劣坊間野師の治術に過ぎず故を以て其當

時にありては齒科に従事する者を以て今日の如く世人醫者なりと見做す能はず加之渠等は一の賤業者として社會の親睦場裡より殆んど摺拆に附せられたる者の如し之れ蓋し其理一にして足らざるも今其の主なる者を上ぐれば渠等が學識に暗く隨意に業を開き一の木片を以て入齒を製し齒痛あれば其病原をも顧みず單に齒齧より放血し又は石粉の如きを藥品に紛らはして塗布し之にて治せざる時は拔齒し次で入齒を製造して金錢を奪ひ敢て學術を研究して之を實地に應用し經驗を積んで専門上の發達進歩を

計るが如きは夢にだも有せざる所故に渠等の治療のためには顎骨を折傷し又は藥品乱用のためには知らず職らずの間不測の過害を受けること予等の屢々見聞する所なり斯の如く拔齒及び入齒の製造人たるに過ぎずして唯に糊口の一手段たり渠等が路傍にて長刀を引抜き又は獨樂を廻し或は水糞等をなして多くの人を集め製粗磨齒粉膏藥等を販賣し其他種々様々の方法を以て無暗に金錢を奪ひ以て自己の生活を遂げしが如き必竟世人として卑下するの已を得ざるに至らしめたる亦宜なるかな而かも其餘波

今日に延んで成期の試験を経たる醫師も世人往々野師等
と同視するは實に醫の齒科に従事する者の慨歎悲憤に耐
へざる所なり
然るに明治維新以來醫學は日に月に一寫千里の勢を以て
進歩し將に歐米の醫學に凌駕せむとす從て齒科專修の大
家續々輩出して往古齒科の面目を更め大に擴張刷新し以
て外科と其歩を同視するに至らしめたり嗚呼其苦心勞力
そも何計ぞや
故に政府に於ては之が専門醫を設くるの必要を認め即ち

明治十七年法律第三十四号を以て醫術開業試験を舉行し
齒科の専門科を設けられたり我國に於て齒科専門醫を生
じたる實に此時を以て嚆矢とす右最初の試験より漸次今
日に至る迄正式の齒科醫は我全國を通じて僅々四百前後
の小數なり故に人口十万人に對する一人の比例なるを以
て普通醫に於けるが如く到底一般に之を普及する能はず
ために入齒師にして今尙は遺存し齒科とか齒科専門診察
所杯と曖昧的の看板を掲げ言語を左右に廻はして世人を
籠絡する者實に少からず

斯る妨害物の存在するにも係らず齒科醫術は更に他に高尚なる學術の程度を有し殊に専門たる無限の深味を備へるなり今諸氏の了解に便ならしめむために學科目を掲ぐれば

- 解剖學、生理學、化學、理學、內科學、外科學、藥物、診斷學、精神
- 病學、齒科解剖學、齒科生理學、齒科治療學、齒科器械學、齒
- 科、金學、齒科應用化學、齒科診斷學、微菌學、齒科法醫學
- 齒科病理學、

等にして現に東京齒科醫學院の如きは右の科程以上を教

授しつゝあるなり。

故に當時の専門醫たる者猥りに患者を胡魔化し口述を左右に托して非道の金錢を射る忽の野師輩と大に懸隔したる處あらむや世の病者たるもの夫れ須らく之等の点に安堵して速かに醫治を求めざるべからず諺にも謂はずや醫は之れ仁術なりとア、又宜なる哉。

口腔

口腔は顔面の下部にして唇及び頬によりて空洞を圍包し而して口の前面及び左右境界をなし上部は上顎に附着す

る即ち口の蓋をなす所を口蓋と謂ふ而して口蓋は前後の
りて其前部の硬き所を硬口蓋と謂ひ后部の懸垂(俗に喉
豆)と稱する前部の指頭を以て押すも軟き部分あり之を軟
口蓋と謂ふ而して舌は口腔の下底をなすものにして運動
自由なるものなり又口腔には三個の唾液腺とて唾液を排出
する装置あり此唾液に依て食物を潤し歯牙に依て食物を
細碎し舌に依てろの食物を丸め同時に食塊を嚥下する
を有せり而して唾液はなほ胃の消化を補助するの作用あ
る

口は身体諸組織と解剖的大關係を有する者にして凡て口
内を包みたる粘膜は咽頭より氣管胃腸の粘膜と一
様にして互に連続せるが故に疹病も又此組織的連続の關
係に依つて互に交感する者なり即ち齒病より他の全身病
を起し又全身病より口腔病を發するが如き非常の大關係
を有する者なり
例之ば胃腸加答兒及び胃炎等を患ふる時は舌齒齦に炎症
潰瘍を生ずるとあるは予の臨床上屢々認むる處なり
又た口の粘膜は呼吸器とも大に關係を有するものにして

即ち咽頭より肺に通じ居るが故に兎唇及び前歯の飲立は肺疾豫防上重大なる者なり何となれば之等の人は不潔なる空氣をも直接に肺内に吸ひ込むを以てなり嗚呼一般の呼吸器病者よ夫れ茲に注意を要せざるべからず要するに口腔たる上下顎骨に歯牙ありて食物を咀嚼し舌あり唾液ありて嚥下を容易ならしめ兼て食物の味ひ及び物質の硬軟粗滑温寒等を覺知すると共に口腔には全身諸器に分佈する血管神経を富有するを以て予が前述せる疾病の交感を起し口腔の玄妙優美なる味覺觸感も忽然害せ

らるゝに至つては口腔の衛生豈唯に忽楮に附するを得むや加之予が過年實驗したる急性齒膜炎の患者の如きはために心藏肥大症を起せるなりき實に口は万病の源なりと謂ふ世人の言に應へるにあらすや況んや尙ほ口腔の不潔は赤痢コレラ肺病等の如き傳染病の微菌を宿せると予等の實驗するに於てをや

齒 牙

齒牙は上部は上顎骨に植立して下方に向ひ下部は下顎骨に嵌入して上方に向ひ人体中最も堅硬にして咀嚼器關の

緊要具なり今之を八種に別ちて説明せん

齒牙の顎骨に
固着せる有様

- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|
| (八) | (七) | (六) | (五) | (四) | (三) | (二) | (一) |
| 齒齦 | 骨膜 | 顎骨 | 齒根膜 | 白堊質 | 珐瑯質 | 象牙質 | 齒髓 |
| | | | 齒牙の三部 | | | | |
| | | | 齒頸 | 齒根 | 齒冠 | | |

之れなり

- (一) 凡て齒の中心には空洞あり之を髓腔と謂と此中には無數の血管神經に富める軟体あり之を齒髓と云ふ。
- (二) 象牙質は齒牙の大部分を形成して中部に齒髓を含み根部に達する小管あり之れ實に顎骨より來る血管神經の通路とも云ふべし
- (三) 珐瑯質は齒牙の齒冠部に厚着して最も堅き質なり
- (四) 白堊質は骨質と其構造硬度を同ふして齒根を包み齒根膜に固着す
- (五) 齒根膜は顎骨と齒牙の間にありて齒槽より齒牙の拔

け出でざる様より附着せるものなり

(六) 顎骨は齒の植立せるものにして各齒根に應ずる窩を

有せり

(七) 骨膜は骨を包みて筋肉を附着せしめ又骨に營榮物を

送る者なり

(八) 齒齦は筋纖維に富める組織にして各齒牙の頸部を包

み通常淡紅色なれども或人は黒褐色の齒齦を有せり

此種の者は靜脈鬱血症として必ず全身病と關係を有せり然れども齒石の堆積も其原因たること少からず

又齒牙には三ツの名稱あり即ち齒冠、齒根、齒頸之なり

(一) 齒冠は齒の齒齦より露出したる部分を云ひ

(二) 齒根は齒槽中に潜伏する部分を云ひ

(三) 齒頸は齒冠の齒齦に被覆せらるゝ部分にして齒冠と

齒根の間にある狹窄部分なり此部は珪瑯質と白堊質の結合点にして神經纖維の末端なれば齒齦収縮のため痛みを發すること屢々あり

而して齒に分佈する神經は何れも腦髓より起る第五對三叉神經と云へる神經の枝別にして血管は何れも外頸動脈

と云へる大なる動脈の内頸枝と云へる枝別より來り筋肉骨質を貫通して各齒の根端の小孔より入り前述の髓腔に終れり尚齒根、膜齒槽にも數多分佈せり

齒牙の分拆

齒牙は有機質及び無機質よりなる畧左の如し

有機質は

一、軟骨

一、脂肪等にして

無機質は

一、磷酸石灰及びフロール石灰

一、炭酸石灰

一、磷酸マグネシヤ等なり

右の如く無機質は所謂土質にして酸類に溶解し易きものなり故に齒牙には酸類を避けざるべからず例へば人のよく知る鹽酸硝酸の強液に齒牙を數時間乃至一日間浸し置く時は只軟根なる有機質のみを残して無機質は殆んど溶去し盡されたるを見るべし

齒齒

齧齒とは俗に虫食齒とて齒病中最も多く見る處なり人々
口を開けば殆んど之を有せざる者なしと謂ふも敢て過言
にあらざるなり而して多く口内に於ける食物の腐敗分解
より或は胃病熱病妊娠等の時口内に酸類を醸生し其酸類
のため齒質は溶解されて茲に所謂齧齒を生ずるものにし
て必竟口内の掃除怠慢より起るものなり齧齒は一種傳染
牲の疾患なるを以て最も注心せざるべからず其一たび齧
齒に罹るや最初は疼痛僅微なるも病勢尙増進して前述の
齒髓を暴露するに至るや疼痛耐ゆべからず熱寒硬固の飲

食物は元より咀嚼嚥下する能はず體質の善惡に依りて屢々
諸種の神経痛を起し憂鬱懊惱其苦しみを如何せむよし疼
痛は自己の手段に依りて一時防止するを得るとするも病勢
は到底絶つべくもあらず腐蝕齒には諸種の微菌充満して
稍もすれば呼吸器病消化器病等を併發し齒牙の病勢は更
に進んで齒根膜炎とて齒の根の膜の腫れを起し所謂齒は
浮き上りて食物の咀嚼に苦痛を生じ更に轉じて齒槽膿腫
に罹れば齒根部に膿を醸し頬齒齦の腫れを起し頬に口を
開けば惡臭ある膿を絶へず排出し其傷癒ゆるも過半再發

の恐れありて到底抜齒の己むを得ざるに至る加之類は四
み入りて所謂昨日の美容今日の醜貌と化するに至つて醫
治を乞ふも臆既に遅いかな
齶齒の治療元より博識老練の齒科醫に托せざるべからず
同じく齒科に従事する醫士と雖も甲患者に使用せし諸器
械の消毒不充分より醫士が遂に媒介者となりて乙患者に
傳播せしむること少からず故に乙患者は不測の疾患を併
發して増々苦みを重ねるに至る況んや無學無識の治療家
をや

以上予が諸氏に向つて齶齒治療の忽緒に附すべからざる
を説くと共に全身病との關係大なるを以て其療法の如き
元より局部に止まらず時には全身療法をも施すべき多識
老練の齒科醫に依頼せられむことを切に勸告する者なり

口腔炎

口腔炎とは口内粘膜の疾病にして主として二三歳の小兒
に多く之に次ぐに老人とし壯年の人には稍まれに屬す而
して之が種類の二三を掲ぐれば加多兒性口腔炎、潰瘍性口
腔炎、梅毒性口腔炎、汞毒性口腔炎、亞布答性口腔炎、寄生性

口腔炎、壞疽性口腔炎等にして生齒困難、腐敗の乳汁、乳塊器の不潔、衣服の不潔、住所の不潔、粗惡の飯食物、空氣の汚浸、榮養不給、先天梅毒、感冒、等其主なる原因なり其他大人は大酒家、大喫煙家、動搖齒、朽腐齒、根齒、石の鬱積、胃加多兒等其他部の疾病波及より來り之を一々枚擧するに耐へざるなり」

上述の如く病名原因多々なるも殊に梅毒性口腔炎の如きは梅毒を有する人に起り必ず惡性の口腔炎を起し、又水銀療法とて多量の汞劑を服用せしめたるときは直に齒牙弛緩し舌齒齦は腫れ上りて口内鑛味を帶び唾液は絶へず溢

出して齒牙は遂に脱落するに至る寄生物性口腔炎とは齧口瘡と謂へる一種の微菌のため起り壞疽性口腔炎とは腺病、消化器病、發疹熱、肺炎、チブス、マラリヤ等のために發し何れも咀嚼嚥下に困難にして疼痛甚しく呼吸惡臭を帶び經過善しからずして全身漸々衰弱し敗血性全身病、小葉性肺炎、壞疽性肺炎、惡臭下痢を發し發後二三週日にして遂に死亡の悲哀を見るに至るア、諸氏の口腔衛生夫れ之れにもある哉

乳齒及び成齒

人間一生の間に必ず二種の歯牙を發生す其第一を乳歯と云ひ只暫間之を用ふるに過ぎず此齒は小兒生后六七ヶ月より三十六ヶ月間に發生す而して各顎に前齒四枚犬齒二枚臼齒四枚都合十枚上下總計二十枚あり、
 又小兒の七八歳に至れば乳齒は抜けて久しく使用する成齒は交換す之を齒牙の齧齧と云ひ其數各顎に前齒四枚犬齒二枚小臼齒四枚大臼齒六枚都合十六枚上下總計三十二枚を發生す故に乳齒は成齒の四枚の小臼齒と二枚の大臼齒とを欠ぐと成齒の如く黄色を帯びずして乳白色をなし

凡て形の異なるは其主なる差異とす、

齒牙發生順序

乳齒發生時期

- 一、前齒 五ヶ月乃至八ヶ月間
- 一、側切齒 七ヶ月乃至十ヶ月間
- 一、一臼齒 十一ヶ月乃至十四ヶ月間
- 一、犬齒 十四ヶ月乃至二十ヶ月間
- 一、二臼齒 十八ヶ月乃至三十六ヶ月間

成齒發生時期

- 一、第一犬臼齒 五ヶ年乃至七ヶ年間
 - 一、前齒 六ヶ年乃至八ヶ年間
 - 一、側前齒 七ヶ年乃至九ヶ年間
 - 一、第一小臼齒 九ヶ年乃至十ヶ年間
 - 一、第二小臼齒 十ヶ年乃至十一ヶ年間
 - 一、犬齒 十一ヶ年乃至十三ヶ年間
 - 一、第二大臼齒 十二ヶ年乃至十四ヶ年間
 - 一、智齒 十七ヶ年乃至四十ヶ年間
- 各人に依り遅速ぬれども大畧右の順序年齢に發生す而し

て下顎齒は上顎齒より約二三ヶ月間先に發するものなり
 亦本表を記憶するの最も必要なるは小兒の齒牙發生の際
 亂列を來し易きを以てなり世の父母たる者豈注心留意せ
 ずむばあらず

乳齒の難生

乳齒の發生順序は前述の如くなれども一たび其發生の困
 難に罹るや小兒をして死に至らしむること少からず這は
 齦肉硬固壓張して齒齦充血を起し小兒の身軀諸系の神經
 感覺過敏なるは身軀諸組織の軟弱にして血管の富めるは

以て急性脳膜炎或は痙攣症狀に陥るにあり齒科醫術開け
 ざる以前にありては未だ茲に注意の至らざるを以て齒牙
 難生のため苦惱しつゝ死したる小兒實に少からず故に齒
 牙發生の時期には醫の診察を受くべし凡て嬰兒齒牙發生
 の時期には大概不穩にして睡眠中時々驚きて悲啼し母は
 夢を見しと誤想するとあり
 又嬰兒の時に身体の衰弱を來すか或は他の病あるときは
 齒牙の發生を妨げために恐るべき小兒病を發することあ
 り殊に吐乳青便は脳膜炎胃腸病を起し易ければ世の父母

たる者斯る時には早く醫治を怠るべからず
 故に此時期には温湯を以て柔らかき布片に浸し數回口内
 を拭ふべし然るときは乳齒の齶蝕を防ぎ追て完全なる成
 齒を生ずるのみならず嬰兒の補乳により頬或は齒牙の間
 に乳を止め之がため腐敗し口内に潰瘍を起し易きもの故
 是等の豫防上にも口内清潔法殊に母乳を與ふる時には毎
 回乳房を洗滌する等大に効あるものにして怠るべからざ
 ることにこそ、

成齒の難生

に一日をも欠くべからざる緊要器具なり
 若しも歯牙なき時は榮養保續のためには食物を取ると雖も
 咀嚼粉碎の作用を失を以て胃の不消化を起し食慾を減損
 し或は血行病を誘起す加之他人と談話の際唾液をして噴
 出せしむるの失態あり尙ほ小兒の齒牙欠亡は至精神發育
 上に大なる妨害をなす
 又齒牙腐蝕は食物を窩乳に積留して齒の最も大害なる酸
 類黴菌を發生せしめ呼吸悪臭を帯び又之を吸入すれば世
 に恐るべき肺病を惹起するの憂なしとせず世人齒牙の惡

成齒發生時には乳齒の如く難生を見ず然れども大概下顎
 智齒發生時期には十中八九迄は殆んど困難に陥るを免れ
 ず而して初め齒齦を壓迫するが如き感を與へ日ならずし
 て腫脹劇痛を發し頭痛發熱、顔面潮紅、結膜炎等起し甚だ
 しきに至つては扁桃腺炎、牙關緊閉(扁桃腺炎とは先づ咽頭
 の疾患と知るべく牙關緊閉とは口を開く能はざる病症と
 知りて可なり)を併發し一層甚だしきに至つては痙攣を發
 すると少からず
 此病を起すの原因は顎骨と第二臼齒の後側なる至つて狹

き所に發するが故に智齒近傍の齒齦神經を壓迫するに基
くものなれば時には齒齦を切開し或は抜齒せざるの已む
を得ざるにあり之も早く多識の醫に治療を受くるを適當
とす

齒牙と全身の關係

人の健康を保護する方法數多ありと雖も先づ食物を以
て最大急務なりとす而して其食物を取るの道は口腔にし
て齒牙を以て其食物を咀嚼細碎し胃の消化を助け兼て顔
貌を裝ひ且つ言語調節器にして個人的衛生に社會的交際

しきは大概胃病又は貧血家多く之れ食物を粉碎せざる
齶窩の腐敗惡液或は微菌或は漏膿等を胃に送達し或は吸
入するより起る然るに世人齒病のとは放漫にして更に意
に介せざるなり

又齒牙は前述の如く胃病と關係する大なるのみならず齒
病のためには神經の異状よりして白内障と稱する眼病の
原因となすことあり又子宮痙攣、癩癩、聲啞等の轉脈を見
るとあり彼のリヨウマナス梅毒、糖尿病、尿病、殊に熱病は齒病を
起し易し如斯相互に密接の關係を有するを以て齒病と雖

も等閑に附すべからず之を輕視して一生の健全を誤るは予が今更に謂ふを待たず

熱病中の注意

健康時の唾液は中和亞兒加里性なるが故齒牙を害するとなしと雖も一朝熱病に罹る時は總ての粘液は酸性に變ずる者にして齒牙を害すると大なり妊娠中齒痛の多きは其一例なり之が豫防法をして重炭酸曹達の如き亞兒加里性の含嗽をなすべし

齒石及び血石

齒石とは俗に齒の盤と稱するものにして齒の周圍に附着し血石とは齒根に沈着して堅硬なり共に之が附着ある時は齒齦を刺戟し口内加多兒を起し或は齒齦を暗紫色ならしむ而して之を除かざるときは齒槽膿漏と稱する疾患に陥り齒牙の周圍より漏膿し又氣管枝加多兒に轉化する稀ならず其他齒石は惡臭を帶ぶるものにして且醜き者なり齒牙の動搖及び挺出するは之等の刺戟に依て齒齦より分離するものなり故に齒石の除去は急務なり然れども老練なる醫師に之が掃徐を受けずんば齒石のみを除去して

最も有害なる血石の除去を施さるるを如何せむ諸氏夫れ予が言に注心せられよ

涅齒

我國固有の風習として婦人の一たび婚姻する時は齒牙を黒染する方式となせるが如し然れども黒染齒は齒牙に害毒を與ふると今予が言を待たず齒科醫學社會に其弊害たるを一決せり即ち之を染むるに鉄屑を酒に浸したる所謂鉄漿(酸化鉄液)とふし(没食子)を用ひ或は近來ぬれがらすとて硫酸鉄に没食子を混じて用ふるものあり之れ何れも多

量の酸類を含有せるを以て予か前述の齒牙の無機成分を溶解し實に非常の有害を與ふるなり夫れ我國婦人の男子に比して齒牙の腐蝕を發し易き一は茲にも大關係を有するかな加之之がために往々消化器を害して胃病を發し其他食血症ヒステリ―全身衰弱等を起し其結果害を子孫に遺傳すると謂ふに至つては豈寒心すべきにあらすや世の婦女子諸氏宜しく速に全癉すべきなり

磨齒粉

世人磨齒粉は只齒を白くするを以て足れりとするも齒磨

粉不^カ良^{リヤウ}なる程^{ほど}齒^ハを害^{ガイ}するものなり坊^{バウ}間^{カン}販^{ハン}賣^{バイ}する所^{ところ}の齒^ハ磨^ガ粉^コは大概^{たいがい}少量^{しょうりやう}の鹽^{エン}酸^{サン}加^カ里^リ浮^フ石^シ末^{マウ}麥^{マク}粉^コ等^{とう}にして製^{せい}したるものなれば浮^フ石^シ末^{マウ}の爲^{ため}には齒^ハを粗^ソ造^{ゾウ}ならしめ齒^ハ齧^ガを傷^{しやう}害^{がい}し鹽^{エン}酸^{サン}加^カ里^リも直^{ちよく}接^{せつ}には却^{かへつ}て害^{がい}を及^{およ}ばし麥^{マク}粉^コの如^{ごと}き口^{くち}内^{ない}に於^おて數^{すう}時^じ間^{かん}唾^た液^{えき}に會^あへば酸^{さん}類^{るい}を醸^{じやう}生^{せい}し此^{この}酸^{さん}類^{るい}齒^し質^{しつ}を脱^{だつ}灰^{かい}す右^{みぎ}の如^{ごと}き理^り由^ゆに於^おて齒^し牙^が齧^ガを損^{そん}害^{がい}し寒^{かん}熱^{ねつ}硬^{かう}固^この飲^{いん}食^{しょく}物^{ぶつ}に逢^あて痛^{いた}を發^{はつ}し齒^し齧^ガ瘦^{しやう}削^{せう}のため齒^し牙^がの動^{どう}搖^{りやう}を來^{きた}するに至^{いた}る然^{しか}らば如^{ごと}何^かなる磨^ガ齒^ガ粉^コを以^{もつ}て良^{りやう}好^{かう}なりとするや乞^こふ左^さに之^{こゝ}が要^{よう}点^{てん}を掲^かげむ

一、防^{ぼう}腐^ふの効^{きう}あるもの二、齒^し齧^ガを健^{けん}康^{かう}ならしむるもの三、齒^しを磨^ガ耗^{かう}せざるもの四、化^か學^{がく}的^{てき}作^{さく}用^{よう}により汚^{きつ}物^{ぶつ}を溶^{よう}去^{きよ}する力^{ちから}を有^{ゆう}するもの五、鎮^{ちん}痛^{つう}の功^{こう}あるもの六、惡^{あく}息^{しつ}惡^{あく}味^みを有^{ゆう}せざるもの七、殺^{ころ}菌^{きん}の効^{きう}あるもの八、全^{ぜん}身^{しん}局^{きよく}所^{しよ}に毫^ごも害^{がい}なきもの九、齒^ハに粘^{ねん}着^{ちやく}せざるもの、等^{とう}之^これなり俗^{ぞく}間^{かん}に販^{ハン}賣^{バイ}する磨^ガ齒^ガ粉^コたる其^{その}數^{すう}一^{いつ}二^ににして足^たらずむば予^よも一^{いつ}々^{ごと}其^{その}成^{せい}分^{ぶん}を知^しるの違^{ちが}ひ若^もしマ^マグ^グネ^ネシ^シヤ^ヤ炭^{たん}酸^{さん}石^{せき}灰^{かい}及^{およ}び最^{さい}良^{りやう}の藥^{やく}用^{よう}石^{せき}鹼^{けん}にて製^{せい}したるものゐらば諸^{しよ}氏^し之^こを使^し用^{よう}せられよ又^{また}齒^ハ刷^す子^しの如^{ごと}きも軟^かに過^かぎず硬^{かた}に失^{しつ}せざる中^{ちゆう}位^い

のものたるべし予が薬局にて製調せしむる磨齒粉は右の
要点に最も注意せしめあるなり、

齒牙に砂糖及び飲酒の關係

各人は一種の癖ありて酒を嗜むあり菓子愛好あり以て
樂となせり、

而して齒牙に砂糖の害あることは世人の一般知る處なり
然とも予は砂糖の齒牙に害なしとせずと雖も之れ必竟局
處作用にして齒間齶窩に逗留するより漸々醱酵作用を起
して一の酸類を醸成し以て齒質を崩壊し種々の疾患を起

治療

す者なれば食后水温湯曹達溶液等にて含嗽を置かば恐く
其害を起すことなしと信す又砂糖は胃に入りて乳酸に變
じ石灰分を溶解して吸収し易からしめ以て小兒の保育上
に効あるも元より多量は禁せざるべからず右の如く砂糖
含有物即ち菓子の如きは局所作用なるも多量の酒は全身
の組織よりして齒齦に一の疾病を起し次で齒牙の病を起
すものなれば齒牙に於ける砂糖及び酒類は適量を用ひて
衛生を重せずばあるべからず、

現時齒科治療の進歩したること著しく往時不治の疾患として、直に抜去したりし歯牙の病も殆んど全治せざる者なきに至りたる豈偶然にあらざるなり

彼の齒槽膿漏(はくさ)の如き齒槽膿腫の如き歯牙より起る齒齦病の如き欠唇の如き無鼻の如き硬軟口蓋破裂の如き其他齒列不正の如き皆之れ全治するを得るに至りたる也

齒牙充填

充填を要すべき歯牙は必ず齶齒欠齒ならざるべからず世に健全齒を欠ぎて迄も金を充填して輝々たる光彩を悦ぶ

ものあり實に大なる誤なるかな、

由來金を充填するは裝飾のためならず又俗に謂ふ口内の熱を去るためにもあらざるなり只他の充填物例へばセメント、銀等を充填し能はざる場合と永久に其部を保護すべき場合と消耗變色等の恐れある場合等にして歯牙の補欠材中今日にあつては第一の者なり

而して齶窩欠損部を充填するには必ず先づ其部の状態に依り或は鎮痛せしめ或は消毒を施し或は充分防腐せし後前記のセメント、セメント、金銀等を以て充填せざるべからず予

は無學無智の治療家が是等の点に注意せずして齶窩欠損部を直に充填し之がため忽ち疼痛を増劇して結果予の治療を乞ふもの續々なるを見て痛難悲難の念に耐へず若し夫れ金或は銀を充填せし後此疼痛を發せしとするか到底拔齒の己を得ざるに至ること少からず諸氏よく此点を熟慮せざるべからず

義齒

天然齒の欠亡は美容を損傷し言語を不明ならしめ唾液を噴出せしめ咀嚼粉碎の能なきを以て消化器を害する少か

らず而して之を補修せしむる者は即ち義齒なり、住古は世の所謂野師なる者骨象牙、木片、石等を用ひて齒牙の形狀を作り糸を以て隣齒に結束せしめ以て保持の用をなさしめたるも何れも口腔に於て化學的作用を受け久しからずして汚朽し悪臭を帶ぶるに至るのみならず固定せしめんとする糸は到底其義齒をして咀嚼粉碎の用に耐ゆるを得ず然りと雖も現時の製造になる義齒は色澤、形狀、硬度等殆んど天然齒に異なることなくば咀嚼粉碎の作用も言語調節の効能も顔貌醜容の快復にも全然欠点なきに至

りたるなり之れ實に齒科醫術の開けたる恩惠の賜なり、
 又齒の根のみ残りて健全なる時は磁齒に軀軸を製して繼
 續せしむれば毫も天然齒と異なる事なし、
 又世には健齒を抜去して金義齒を望むものあれども事少
 しく愚想到に傾き元より賞賛すべきにあらず然りと雖も予
 が充填の處に述べしが如く義齒にも亦金を使用するの已
 を得ざる場合あり宜しく醫に委ぬべきなり、

再植術

再植術とは一度抜去したる齒を再び抜け痕に挿植せしむ

る術にして諸氏若し忽然の出來事より主に前齒犬齒小臼
 齒の抜くる事あらば直に齒科醫に再植を受くべし然すれ
 ば其人の體質年齢其部の状態に依ると雖も再び骨植する
 ものなり其他齒病のため抜去して以上の術を施すことあ
 り

齒列排亂

人々により前齒犬齒の普通より前に出で或は後に入り或
 は其表面を隣齒に向けて發生せることあり之を正列せし
 むる法を齒列矯正術と謂ふ然れども年齢十三三歳より二

十二三歳ならざるべからず其以下には施すべからず以上には殆むと奏功なし、

口蓋破裂

之は多く梅毒のため破裂を起し或は先天性に口の天盖に破裂を生じ言語不明食物鼻に入りて困難する症なり之又治術に依て治するを得べし、

學生と齒病

近來學生の齒病多き實に驚くに耐へたり之れ齒科醫術の未だ普及せざるより否寧ろ世人の之を輕視するを以て從

て之が衛生法を知らざる結果より來るものにして多くは口内不潔或は傳染等なり例へば甲學生の口内に入れし鉛筆を又乙學生が再び口内に入るゝが如きとにして事最少に涉ると雖も之が齒科衛生上大關係を及すものなり而して予が年來の検査に依れば
百中九十は齲齒を有し、 其中三十は齒根病を兼ね、
内二十五は胃腸病を起し、 内五人は齒痛のため休校、
依之觀之學生間如何に齒患の多くして學校齒科衛生の急務なるを知るに足らむ、

結論

要するに齒牙口腔の疾病たる世人の概ね輕視する處なるを以て爲に不測の罹害に陥ると實に稀ならず而して齒科の醫術たる其學深遠なるを以て到底此小冊子の詳述する能はざる處然りと雖も予が上述來の愚説をして幸に水泡に歸せしむる諸氏なくんば齒牙の最も重すべき口腔の最も尊ぶべきを推察せらるゝに足らんか、而して小兒生齒困難のため遂に死に陥るもの實に百中四人の比例なり英國にして猶且然り況んや齒科醫術の未だ普及せざる否寧ろ

輕視しつゝある吾國をや噫齒牙口腔の疾病たる概ね疼痛絶間なく咀嚼嚥下談話に困難を來し頭痛神経痛消化器病呼吸氣病皮膚病視覺器病聽覺器病等其他種々なる全身諸部の疾病を併發し加之害を子孫に遺すに至つては誰か齒科衛生の忽緒に附すべからざるを了悟せざる者やある之れ予が専心諸氏に向て説破せむとする主眼たる也

追告

此書素識者が業務多忙の間に於て寸暇を盗み著はしたる者なれば未だ以て齒科衛生の全病を擧ぐる能はざる

も一先づ茲に筆を止め更に期を視て民間治療全書を著すの時に當り其欠を補ふ所あらむとす

通俗齒科衛生終

明治三十四年三月廿二日印刷
明治三十四年三月廿六日發行

定價金拾五錢

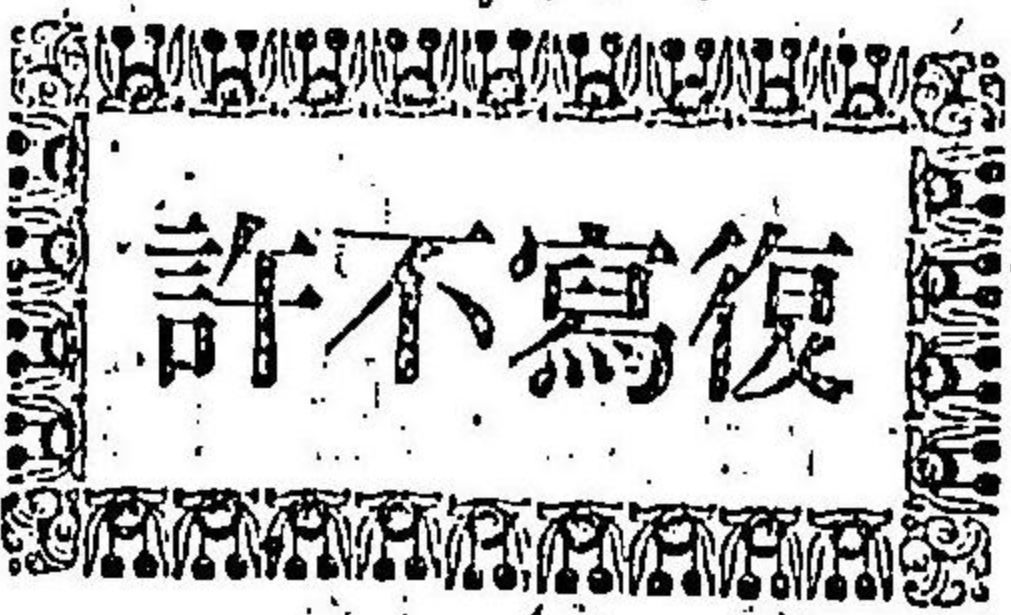
著者兼發行者 熊谷鉄之助
廣島市中島本町十四番屋敷

印刷者 藤浦大順
廣島市中島本町十四番屋敷

發行所 齒科專門 熊谷醫院
廣島市水主町二十七番邸

印刷所 廣島印刷株式會社
廣島市紙屋町二番邸(本通)

發兌元 友田書店



齒科治療廣告

本院ハ患者ノ依頼ニヨリ局所麻痺及全身麻酔ヲ施シテ無痛的ニ手術ス可シ。
本院ハ午前九時ヨリ午後三時迄診療ス。
本院ハ種々ノ方式ニヨリ義齒ヲ挿入ス。
本院ハ口腔、齒牙、齒齦、顎骨、諸病ハ勿論兎唇及口蓋破裂ノ整復手術ヲ施スベシ。

廣島市中島慈仙寺鼻 熊谷醫院

